The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介『運』を読み直す
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	日本語・日本文化. 2023, 50, p. 79-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91266
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

芥川龍之介『運』を読み直す

水野　亜紀子

一　はじめに

芥川龍之介の作品における戦争といえば、日清戦争を題材として扱う『首が落ちた話』（1918）や日露戦争を扱う『将軍』（1922）が思い出される[1)]。『僻見』（1924）には明らかに植民地政策への批判が読み取れるし、『桃太郎』（1924）は日本の植民地政策への露骨な批判が含まれていると読めるだろう。『河童』(1927)にもまた戦争を意識する言葉が見られる。芥川自身が反戦的な思想を持っていたことについては、すでに論じられている通りである[2)]。

本論では、ここに挙げた作品に先立って、芥川が反戦思想と響き合う作品をすでに執筆していた可能性について論じる。『運』（1917）は芥川の歴史小説の一つであるが、表面的には観音の霊験について登場人物が話しているように仕立てられながら、その実、すでに過去のものとなった日露戦争、そして第一次世界大戦に対する考え方や意見がそこに仮託されているのではないかと考えるのである。

先行研究において『運』の主題を考察するものには、運に対する考え方に着目するものが大方を占める。本作が、運をめぐって人生観や人間観を表現する作品、運そのものに対する哲学を表現する作品、信仰への姿勢を表現する作品であると捉えるものである[3)]。もう一つの系譜に、夏目漱石の死との関連を考察するものがある。『運』には漱石の死に直面した芥川の立場や思いが託されていると論じる[4)]。それらに対して、本論では、運をめぐる哲学ではなく、芥川の心情でもなく、時局に対する政治的意見を『運』に読み取る。先に述べたように『運』は歴史小説であるが、初期の作品においてすでに、同時代性、政治性を帯びる内容を持つ作品があることを指摘したい。

以下、『運』の分析では、『運』が典拠となる作品を持ちながらも、その筋に不自然な変更が加えられている点や、敢えて用いられなくなった語、用いられるようになった語に着目する。また、第一次世界大戦前の日本の状況を暗示するものが『運』に登場することに着目する。こうした論じ方は恣意的に感じられるかもしれないが、『運』が発表された時期が 1917 年 1 月であることや、発表媒体が自然主義文学の牙城ともいわれる『文章世界』であったことを考え合わせると、『運』が形式的には歴史小説の形をとりながらも、内容のうえで反戦思想を含むと捉えることは、あながち不自然ともいえない状況があったといえる。まずはその状況について確認するため、第一次世界大戦の勃発時に文壇で見られた傾向や、実際に出されていた意見を見ていく。

二　ベルクソン哲学の受容と第一次世界大戦

第一次世界大戦の勃発当初、文学者の多くはこの戦争を対岸の火事と捉えたという[5)]。その中で、決してそのような態度の文学者ばかりではなかったことが指摘されている。先行研究は、例えば武者小路実篤が反戦的な内容の創作を行っていたこと、上田敏や内田魯庵が戦争に対する慎重な姿勢を示していたこと、夏目漱石が冷ややかな態度で軍国主義を眺めていたことなどを挙げ、それぞれの文学者の立場を明らかにする[6)]。「大正中期ほど反軍国主義的な傾向が顕著だった時代はあまりなかった」[7)] ともいわれている。これに加えて、文学者を含む当時の人々の多くが決して第一次世界大戦に対して傍観的であったわけではないと指摘する論稿もある[8)]。当時の世論を一口で説明することは容易ではないが、文学者の中にはこの戦争を対岸の火事と捉えていた者がいたことは確かであろう。

ここで注目したいのは、そうした人々の中に戦争を肯定的に捉える者があったということである。様々な角度から戦争を肯定する意見が出されていたが、その中に、人類の発展にとって戦争は必要なものであると認識する文学者らがいた。この考え方はフランスの哲学者ベルクソン（Henri Bergson［1859-1941］）の影響を受けている。（「ベルグソン」とも表記されるが、本論では「ベルクソン」で統一する。）日露戦争後、日本社会は停滞し、無目的化し、賠償金の不獲得によって不況となるが、そのような状況下で膨張主義を唱えるベルクソン哲学に賛同す

る人々がいた[9)]。宮山昌治「純粋持続の効用―大正期ベルクソニスムと戦争―」は、ベルクソン哲学の「膨張主義的で積極的な面が評価され、迎えられた」「第一次世界大戦が勃発すると、好戦ムード、膨張主義は一気に高まることになった」と説明する。また、稲毛詛風「戦」（『早稲田文学』1914 年 5 月）や中沢臨川「社会と感激」（『中央公論』1914 年 9 月）を参照しながら、詛風や臨川がベルクソン哲学を「戦争推進の政治的言説に変換」した経緯について述べる[10)]。ベルクソンは「創造的進化」（1907）において、生命体の持続には生命の跳躍が必要であることを説くが、一部の人々はこの考えに賛同したうえで、社会の発展には戦争が必要であると独自に考えたのである。

そのような、ベルクソン哲学を好戦論として捉える考え方については、ベルクソン「戦争の意味」（1914 年 12 月 12 日に道徳政治学学士院で行われた講演が 1915 年に英訳されたもの）を中沢臨川が紹介した時のことを取り上げる、宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」に詳しい[11)]。宮山によると、ベルクソンは「精神は物質の抵抗と衝突するものであること、生命は生者を打ちのめさずにはけっして前進しないこと、そして偉大な道徳的成果は多くの血と涙と引き換えることを余儀なくされている」（Bergson, “Discours en séance publique de l’académie des sciences morales et politiques”, op.cit.,p.1116.）として、戦争を「生命の跳躍」（élan vital）の見地から語るものの、講演の主旨を好戦論には置いていなかった。それにもかかわらず、臨川はその講演を、人類の進化のためには戦争の犠牲が必要であると述べたものだと解釈し、講演の「結論」を「戦争の代価が何れだけ払はれようと、若しその為めに人類が遂に今日の逆夢から解放されるならば、それは決して高価ではない」（中沢臨川「ベルグソンの戦争及び現代文明観」『雄弁』1916 年 1 月）と説明したのだという。これについて宮山は「中沢の解釈は、「生命」の発揚のためには〈他者〉を犠牲にしても良いことになってしまうという、社会進化論の弱点を期せずして露呈したものだった」とする。

ここで明らかにされたことは、臨川が紹介したベルクソンの講演内容には臨川独自の解釈が入っているということ、臨川のベルクソン解釈をそのままたどると、戦争は本能の発現であり、人類の進化のためには戦争の犠牲が必要で、「生命」の発揚のためには〈他者〉を犠牲にしてもよいという結論となることであ

る。これは戦争を肯定する立場であるといえる[12)]。

ここまで、第一次世界大戦勃発前までにベルクソン哲学が戦争を肯定する文脈で取り入れられた例と、中沢臨川のベルクソン理解について確認した。次は、ベルクソン哲学から影響を受けていると考えられる文学者たちの意見を見ていく[13)]。まずは、田山花袋、長谷川天渓についてである。すでに中山弘明の指摘があるが[14)]、花袋は「戦争と文学」（「時事新報」1914 年 8 月 13 日・14 日）で戦争について「力の緊張と言ふ意味から言つたら、これほど壮快なことはあるまい。新しい芸術、そこからは屹度新しい芸術の気分が生れて来る」と述べる。天渓は「戦争と思想」（「時事新報」1914 年 8 月 27 日）で戦争を「世界を一新する大掃除」に例え、「我が国の物質的文明」が、この戦争の「輸入杜絶」によって一転し、かえってその中から「新しい元気」が生まれるはずであると説く。

次に見るのは『文章世界』である。『文章世界』は自然主義文学の拠点と見做されていた雑誌で、1906 年 3 月から 1920 年 12 月に博文館より発行された。編集は創刊号から 1913 年 3 月号までを田山花袋が、1913 年 4 月号以降を長谷川天渓が、1917 年 7 月号以降を加能作次郎が担当した[15)]。大和田茂が説明するように[16)]、文学者の第一次世界大戦への発言を掲載した特集には、『文章世界』（大戦の勃発直後、日本が参戦する直前）と『太陽』（終戦近く）があった。1914 年 9 月の『文章世界』の特集「欧州大戦観」には、ベルクソン哲学を意識した発言を確認することができる。

そこに意見を寄せたのは、岩野泡鳴、鈴木三重吉、野口米次郎、三井甲之、小川未明、相馬御風である。中山弘明が端的に指摘するように[17)]、「戦争を一つの「生命現象」とみる」考え方が論者に共通する。その中で、明らかに反戦の立場をとるのは小川未明で、人道的な観点から戦争に反対する。鈴木三重吉は「訳もなく愉快でたまりません」と述べて日本の参戦を願う。文章中の言葉をそのまま受け取るならば戦争に肯定的な立場であるといえるが、「愉快」と感じる理由や参戦を願う理由を詳しく述べない様子が不自然であることや、反戦小説をいくつか残していることを考え合わせると、断定するには保留が必要であるかもしれない[18)]。

その他の四名は戦争に肯定的である。野口米次郎と相馬御風が第一次世界大戦

を対岸の火事とする姿勢は明らかである。岩野泡鳴は、文藝は自己生存のため、戦争は国家生存のため、自己生存も国家生存も一つのものであるから戦争即文藝であると述べる。三井甲之は文章中に「ベルグソン」と記す。「今回の動乱には各国の経済的事情が根柢に存して居ると同時に民族的生活の求心的運動が認めらるゝ」として、ベルクソン哲学は戦争の時代にこそ意味を持つといった内容の主張を行う。ちなみに、この特集の二ヵ月後に『文章世界』誌上で田中王堂「刻下の戦乱と我国の思潮」（1914 年 11 月）が、外国の思想を無批判に受け入れ喧伝することを危ぶむが、ベルクソンに触れられていることから、この記事もまたベルクソン哲学が多くの人々に影響を与えていることを裏付けている。

三 『文章世界』と芥川

ここまで、文学者の間で、戦争を一つの生命現象と捉える動きがあったことを確認した。その中から、田山花袋や長谷川天渓の言説、『文章世界』に見られる言説を取り上げた[19]。花袋や天渓、『文章世界』の言説を中心に取り上げたのは、後に詳しく論じるように、『文章世界』に掲載された芥川の『運』が、そうした戦争を肯定する考え方への反発を内容としている可能性があると考えるからである。ベルクソン哲学を受容しながら戦争を肯定していく人々に対して、芥川が実際に何か意見を述べた形跡はないが、芥川が学生時代からベルクソンに関心を持っていたことは確かである。一高時代の親友である井川（恒藤）恭への手紙には、何度かベルクソンへの言及がある。高橋龍夫は芥川がベルクソン関連の著作を少なくとも四作は読んでおり、関心を寄せていたことを指摘する。その中には「創造的進化」（1907）も含まれる[20]。ベルクソン哲学が好戦論として受け取られている状況が、芥川に『運』を書かせたのではないだろうか。

ここで敢えて芥川の執筆動機を推測するような書き方をした理由は、『運』が発表された媒体が、田山花袋や長谷川天渓が活動する『文章世界』であることと関係する。芥川にとって『運』（1917 年 1 月）は『文章世界』への初めての寄稿であったが、その時期、芥川は、『文章世界』を多分に意識せざるを得ない状況であった。以下、時間の流れに沿って簡潔に、『文章世界』やそこで活躍する作家にかかわる出来事を一覧として記す。一覧を表面的に受け止めれば、芥川に

とってこの時期は作品が酷評を受けたことに反発を感じた時期であろうが、先のベルクソン哲学のことを考慮すれば、一覧中にある『運』の発表は、『文章世界』やそこで活躍する作家に対する挑戦と見ることができる。これは内容面と形式面からの挑戦である。内容面の挑戦とは、ベルクソン哲学を好戦論として受け取る戦争観に反発することを指し、形式面の挑戦とは、歴史小説への否定に反発することを指す。

・芥川が『羅生門』（『帝国文学』1915 年 11 月）を発表する。これは当時文壇からほぼ黙殺されており、『文章世界』においても触れられていない。
・芥川が『芋粥』（『新小説』1916 年 9 月）で本格的に文壇に登場する。加能作次郎が『文章世界』で評価する。「（注・五位の）幻滅の悲痛な心持がよくあらはれて居た」（「九月の創作」1916 年 10 月）
・田山花袋が『文章世界』で『芋粥』と『手巾』（『中央公論』1916 年 10 月）を酷評する。『芋粥』は「何に意味を感じて作者が書いてゐるのか少しもわからなかつた」『手巾』は「何処が面白いのかといふ気がする」（「一枚板の机上―（十月の創作其他）―」1916 年 11 月）
・広津和郎が『煙管』（『新小説』1916 年 11 月）を酷評する。「甚だしく失望した。氏の他の作を読んで見ないからはつきりしたことは云へないが、この作では私の期待したやうなものは何もなかつた。唯何か或る興味を人生から発見して、それを話上手に語つてゐるに過ぎない。常識と常識から来る利口と器用な手との持主だと云ふに過ぎない」（「十一月の文壇―創作及び其他―」「時事新報」1916 年 11 月 8 日）
・芥川が『MENSURA ZOILI』（『新思潮』1917 年 1 月）を発表する。12 月号のために書かれたものであったが、雑誌が休刊になったため 1 月号に掲載される。内容は自然主義文学や自然主義作家への懐疑。『煙管』や『手巾』が酷評されたことを受けて書かれる[21)]。
・中村孤月が『文章世界』にて、特にどの作品とは明示しない形で芥川の作品を酷評する。「巧みであり、面白くも有り、一面漱石氏の作に似、一面潤一郎氏の作と似て居るけれども、何の為めに彼あいふ創作を為るかと考

へると、甚しく解らなくなる。自分は氏の今後に期待を有ち得ないものである」（「来る可き時代の文壇」1916 年 12 月）

・中村孤月が『運』（『文章世界』1917 年 1 月）を酷評する。「文章世界の運と新潮の尾形了斎の覚え書とを読んだ。芥川氏が何の為めに斯ういふ創作を為るかと考へると、其処には多少人間の生活に対する社会の多数の考へに新しい心を起させようとして居る所が見られぬでもないが、其考へが確りして居ないから、妙なものばかり書いて居る。浅薄で、希薄で其上に今日の時代の新しさを欠いて居る」（「一月の文壇」「読売新聞」1917 年 1 月 13 日）

・芥川が松岡譲宛の書簡（1917 年 1 月 19 日付）で田山花袋を酷評する。「あいつ（注・花袋）の自然主義を標榜して自然主義の小説が書けないのは禿頭が髪はへ薬の広告をしてゐるやうなものぢやないか」[22)]

一覧中に示した評論の引用から分かるように、芥川の歴史小説はその意義が理解されていたとは言い難い。「何に意味を感じて作者が書いてゐるのか少しもわからなかつた」「何の為めに彼あいふ創作を為るかと考へると、甚しく解らなくなる」「浅薄で、希薄で其上に今日の時代の新しさを欠いて居る」とある通りである。

例えば、同時代の評論を見ていくと、「時事新報」掲載の匿名氏「蕾のふくらむ頃」（1917 年 3 月 7 日）には芥川の歴史小説を評価する言葉がある。「芥川氏の「芋粥」とか「運」などは決して単なる歴史小説ではない。氏の哲学なり思想なりを具体化する為に時代を道具に使つたに過ぎない。平安朝の空気が鮮かに浮んで居たとしても夫は氏の秀れた技巧から生ずる副産物に過ぎない。氏の作品の目的は外に在つたのだ」とある。ただ、そこまで書かれただけで、「作品の目的」がその先に述べられることはなかった。

芥川の歴史小説は、同時代において決して理解されやすいものでも、評価されやすいものでもなかったといえる。そのような中で、『運』は『文章世界』で活躍する作家らに対抗する目的で、歴史小説の形がとられたのではないかと考える。その一方で、反戦という、内容面での挑戦については、次章から始める『運』

の内容の検討を経た後に、改めて述べたい。

四　原典からの改変

芥川『運』の中で、翁が青侍に聞かせる「西の市で績麻の鄰を出してゐる女」（以下、女）の話は『今昔物語集』巻十六「貧女仕清水観音値盗人夫語第卅三」を原典とする[23]。女の話は原典の筋をほぼ踏襲しているが、全く同じではない。改変に意味を見出す立場から、以下二つの変更に着目して、それらの作業が作品に対して持ち得る意味について考える。

一つ目の変更は、『運』に〈尼殺し〉が追加されていることである。細かな改変がいくつかある中で、これはとりわけ目立つ変更であるといえる。原典では、女は尼が水汲みに出ている隙に、反物を持って盗賊の元から走って逃げるという筋になっている。該当箇所を引用する[24]。

> 見れば此の尼戸を細目に開て臨て人の無き隙を量て、桶を戴て出で行ぬ、水汲みに行なめりと見ゆ、女此の間に尼の不二返来一ぬ前に出でゝ逃なむと思ふ心付て、此の得させたる綾絹等許を懐に指入て外に出にければ、走るが如くして逃ぬ、尼返て見るに無ければ、逃にけりと思へども可レ追き方無ければ、然て止ぬ、

これに対して、芥川『運』では女が逃げようとする時に尼に話しかけられる。尼が話の途中で居眠りをした隙に逃げようとするが、欲を出して「今朝貰つた綾と絹」を取りに戻ろうとした時に気付かれる。もみ合った末に女は尼を殺してしまう。その後、逃げおおせた女は持ち去った反物を元手にして店を開き、何不自由ない身の上になるという筋である。原典の筋に〈尼殺し〉という変更をわざわざ加えることで、芥川『運』の女の話は〈人の命を奪って豊かになった話〉へと変更されている。

二つ目の変更は、観音様から授かるものを芥川『運』では全て「運」と呼ぶことについてである。原典では「利益」の語が用いられるが、芥川『運』では「利益」の語は一度も用いられず、それに当たるもの全てが「運」となっている。原

典に「運」という語が用いられていないにもかかわらずである。タイトルにも『運』と付けられている。清水観音の御利益という意味で、そこは「利益」でもよいはずであるが、なぜだろうか。試しに芥川の他の作品を参照すると、芥川は「利益」「御利益」という言葉を決して避けるわけではないことが分かる。

・しかしかうして今日御眼にかかれたのは、全く清水寺の観世音菩薩の御利益ででもございませう（『邪宗門』1918）
・康頼は何でも願さへかければ、天神地神諸仏菩薩、悉あの男の云ふなり次第に、利益を垂れると思うてゐる（『俊寛』1922）
・すると康頼は怒つたぞ。ああ云ふ大嗔恚を起すやうでは、現世利益は兎も角も、後生往生は覚束ないものぢや（『俊寛』1922）
・「多加ちやん？　多加ちやんはもう大丈夫ですとも。なあに、只のお腹下しなんですよ。あしたはきつと熱が下りますよ。」「御祖師様の御利益ででせう？」妻は母をひやかした（『子供の病気』1923）

これらの例から、芥川が「御利益」という語を使用しないわけではないことが分かるため、作品『運』の中で用いられる「運」という言葉は、敢えて選び取られたものであることが予想される。もし作中や題名において「御利益」という言葉を一度でも用いたら、本作にとってどのような不都合があるだろうか。積極的に「御利益」を「運」と言い換えることで、何が達成されるのであろうか。次は作中の使用例である。

「神仏の御考へなどゝ申すものは、貴方がた位の御年では、中々わからないものでございますよ。」
「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだあね。」
「いやさ。神仏が運をお授けになる、ならないと云ふ事ぢやございません。そのお授けになる<u>運の善し悪し</u>と云ふ事が。」
「だつて、授けて貰へばわかるぢやないか。<u>善い運だとか、悪い運だとか</u>。」
「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねませうて。」

「私には運の善し悪しより、さう云ふ理屈の方が、わからなさうだね。」

これは運を授かりたいという青侍と翁とのやりとりであるが、着目したいのは二人の間で、運の中には「善い運」と「悪い運」があるという話がされていることである。「悪い運」とは悪いことをしてもそれに対する報いがなく、かえって栄えるような運を指し、これは不運とは異なる。不運とは運が悪いことである。こうしてみると、作中に「御利益」が用いられないのは、「御利益」はその言葉自体が良い意味を持っているため、「悪い御利益」などという否定的な表現をとることができないことと関係があるのではないか。「運」という言葉を用いれば、先の引用のように「善い運」と「悪い運」という言い方ができる。「運」という言葉が選び取られた背景には、「善い運」「悪い運」といった表現をしなければならない理由があったのだと考えられる。

ここまで二つの改変を見てきた。原典の筋を変更して女の話を〈人の命を奪って豊かになった話〉に変更し、「御利益」という語の使用をやめ、「運」という言葉を全編にわたって用いることで、芥川『運』は清水観音の夢のお告げが女に「善い運」をもたらしたのか「悪い運」をもたらしたのか、青侍と翁で評価が分かれる様を提示することになった。

この不自然な操作は、何を意味するのだろうか。霊験譚の形を借りてはいるが、全く別のテーマを盛り込もうとしているのではないだろうか。そこで、次の章では、『運』に描かれている、青侍の不満、清水寺参り、夢の中のお告げの三つが、作品の外の現実の時間を想起させるもの、より具体的にいえば、日露戦争と第一次世界大戦を想起させるものとして受け取れるのではないかという提案を行いたい。その文脈では『運』の主題もまた日露戦争と第一次世界大戦に関係するものとして受け取れる。

五　青侍の不満、清水寺参り、夢の中のお告げ

まずは青侍の不満に着目する。『運』は平安末期の日本に設定されているが、さらに注意を払いながらみていくと、不景気のただ中に設定されていることが分かる。なぜ青侍が不満なのかといえば、不景気だからである。「私も一つ、日参

でもして見ようか。かう、うだつが上らなくつちや、やりきれない」と述べており、不景気に対して不満を持つ発言をしている。

『運』が発表される 1917 年 1 月頃、日本は大戦景気のピークを迎えていたが[25]、1914 年 7 月に第一次世界大戦が勃発して、8 月に参戦するまでは、日本の景気は最悪の状況にあった。『運』作中の不景気は、第一次世界大戦の勃発時、まだ参戦していない時期の日本の状況と重なる。第一次世界大戦へ参戦する前の日本は、日露戦争後の慢性的な不況と財政危機に悩まされていた[26]。そのような状況であったからこそ、井上馨の「天佑」の言葉もあったといえる[27]。第一次世界大戦を日本の発展の好機と捉え、山県有朋、大隈重信に伝達するために口述筆記をさせた大綱には、「今回欧州の大禍乱ハ、日本国運ノ発展ニ対スル大正新時代ノ天祐ニシテ」とある。そこには、日英同盟によって日本が参戦できれば、中国大陸の権益を拡大することができ、日本の景気も良くなるという目論見があった[28]。そういえば『運』というタイトル自体も「天佑」を彷彿とさせるものとなっている。

次に二つ目の、清水寺参りに着目する。本作は清水寺に参詣する人々で往来が賑わう様子から始まる。本文には次のようにある。

> 目のあらい簾が、入口にぶらさげてあるので、往来の容子は仕事場にゐても、よく見えた。清水へ通ふ往来は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓をかけた法師が通る。壺装束をした女が通る。その後からは、めづらしく、黄牛に曳かせた網代車が通つた。

冒頭から、お参りに向かう人の数の多さが印象付けられている。立場に関係なく、様々な人間が清水寺へ足を運んでいる。往来の賑やかさは、お参りによって救われたいという気持ちの表れである。

清水寺といえば、坂上田村麻呂の戦勝祈願の寺として知られる。田村麻呂の建立寺社伝説は、脚色されながら時代とともに広がったため、有名でありバリエーションも多い[29]。『元亨釈書』には、清水寺の勝軍地蔵と勝敵毘沙門が田村麻呂を救ったという伝説が見られる[30]。こうした背景から、『運』の清水寺参りには

武運長久の連想が働く。清水寺参りに武運長久の連想が働く場合、参詣する人々の描写は、第一次世界大戦直前の不況の中で、戦争によって豊かになりたいと願う人々の存在を思い出させるだろう。経済面で救われたいと願う青侍は、日本の軍人そのものである。青侍の言葉「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だつて、信心をするよ。日参をしたつて、参籠をしたつて、さうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするやうなものさ」は、戦争を金儲けの商売と捉え、第一次世界大戦に参戦することで不況を乗り越えたいという日本の軍人の考えを表すといえる。

最後に着目するのは、三つ目、夢の中のお告げである。翁が語る女の話に出てくる、夢の中のお告げは、瑞夢神話を想起させる。瑞夢とは、日本海海戦前1904年2月6日の昭憲皇太后（明治天皇の皇后）の夢のことで、坂本龍馬が登場して日本海軍を守ると告げたというものである。この話は当時の日本人に圧倒的な支持を受けたという。語り手、夢の内容、夢を見た回数、昭憲皇太后が夢について相談をした相手、坂本龍馬の写真を見るまでの流れは、話によって異なり、様々なバリエーションが見られる。

『坂本龍馬関係文書第1』は瑞夢神話にかかわる文章や作品を紹介するが[31)]、例えば「〇明治三拾七年三月（瑞夢御歌所参侯某氏作）」と紹介されているのは、唱歌「国母陛下の御瑞夢」である[32)]。昭憲皇太后の夢の中で坂本龍馬が日露海戦での日本軍の勝利を予告するという内容となっている。他に、「東京日日新聞」の記事「国母陛下の御瑞夢」（1904年4月18日2面）を見ると、夢のエピソードが紹介された後に、紙上で「之れ瑞夢なり」と評価されていることを確認できる。

芥川『運』の女の話は〈人の命を奪って豊かになった話〉であった。女は夢のお告げに従った結果、盗賊の妻となって反物を手に入れるが、人殺しを犯すことになった。しかしその後は暮らしに困らなかった。夢のお告げに従った結果、人の命を奪うことになったが、その見返りとして豊かになっている。夢が困窮を打破するきっかけとなったという意味で、『運』の女の話は日本海海戦前の瑞夢神話と似通う。

ここまで、『運』作中の、青侍の不満、清水寺参り、夢の中のお告げが、日露

戦争と第一次世界大戦を想起させるものとして受け取れるのではないかと提案してきた。もしそのように捉えるならば、『運』の主題もまた、日露戦争と第一次世界大戦に関係するものとして受け取れる。前章にて、原典からの改変に着目しながら述べたように、『運』には、〈人の命を奪って豊かになった話〉に対し、青侍と翁という二つの立場が用意される。青侍は清水観音の夢のお告げが女に「善い運」をもたらしたとし、翁は「悪い運」をもたらしたとする。次の章では、第一次世界大戦前という時局と絡めて『運』を読む場合、それが何を意味するのかを述べていきたい。

六　青侍をたしなめ、突き放す翁

女の話＝〈人の命を奪って豊かになった話〉をめぐり、青侍と翁の取る立場は全く別々のものとなっている。青侍は、女のように富が得られるのであれば、自分は人殺しくらいの事があっても別にかまわない、それは「善い運」であると考える。すなわち、戦争を金儲けの商売としてとらえることに躊躇がないのである。第一次世界大戦という状況下では参戦を望む立場である。一方、翁は、神仏に祈って富を授けられても、それを得るために人殺しをするのはとんでもないことであると考える。それは「善い運」ではなく「悪い運」であり、そのような運はまっぴらであるとする。すなわち、戦争を否定する立場である。戦争をして豊かになったとしても、人の命を犠牲にするのであれば、それは間違っているという主張であり、日露戦争も結局は日本にとって「悪い運」であったと捉える立場である。

このように『運』には相容れない二つの立場が示される。ただ、留意したいのは、一見すると作中では二つの立場を平等に示すように見えるが、決してそうではないということである。本作には、二人が最後まで分かり合えない様子が描かれた。「二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何ものかを、感じてゞもゐるやうな容子である」とある。その後、青侍が「その女は仕合せ者だよ」と言うと、翁は「御冗談で」や「さう云ふ運はまつぴらでございますな」と述べる。翁は「運の善し悪し」について、例として女の話を挙げながら、青侍をたしなめようと試みたが、全く理解されなかった。翁は

苦々しい様子を見せている。

その一方で、青侍はというと、「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する気でしたんでなければ、仕方がないやね」と、人殺しも、盗みも、「する気でしたんでなければ、仕方ない」と述べている。その言葉は、殺しや奪うこと自体が目的でなければ、戦争は「仕方ない」で済まされるものであるという考えを示すようである。またさらに、冒頭近くでは「日参」と発言していたのが、末尾では「お籠」と発言している。より本格的な願掛けを口にするのである。これによって、青侍が当初から抱いていた考えをより強い確信に変えていることがわかる。

翁は「運の善し悪し」が分からない青侍の愚かさに対し呆れ果てているが、末尾の翁の突き放したような言い方には、青侍への批判が表現されているといえる。その筋をもって、芥川『運』は、自国の利益のためならば戦争を肯定するという意見に対し、戦争は勝ったとしても負けたとしても否定すべきものであるという考えを打ち出していると読むことができる。日本が戦争を「善い運」としか捉えなかったことへの批判にもなっている。

ここまで、第一次世界大戦前という時局との関係から『運』を読んできた。先に、芥川の『運』の発表が、『文章世界』やそこで活躍する作家に対する挑戦と見ることができると述べ、内容面の挑戦とは、ベルクソン哲学を好戦論として受け取る戦争観に反発することであると述べたが、『運』一編の検討を通して、戦争は勝ったとしても負けたとしても否定すべきものであるという反戦思想をそこに読み取る結果となった。厳密にいえば、『運』は、本論の読み取ったところでは、物質主義のために他者の犠牲をかえりみないことを批判する内容を持つ。そもそも、ベルクソン哲学を好戦論として受け取る立場は、物質主義ではなく、生命の跳躍を求めるためには他者の犠牲をいとわないと主張しているため、戦争観をめぐる論点は一致しているわけではない。とはいえ、反戦という観点から見れば、『運』はやはり結果的に、ベルクソン哲学を好戦論と捉える戦争観に厳しく対抗する内容となっているといえる。

七　おわりに

本論では、戦争を題材とした他の芥川の作品に先んじて、『運』がその内容に反戦思想を読み取ることができる作品である可能性について論じた。第一次世界大戦の勃発時、日本ではベルクソン哲学が戦争を肯定する文脈で取り入れられる流れがあったことを確認したうえで、『運』が内容面ではベルクソン哲学を好戦論として受け取る戦争観に反発するものとして読めることを指摘した。形式面においても、歴史小説の形をとることで、歴史小説への否定に反発しているのではないかと指摘した。それらの反発は、『運』を発表した当時の状況から見て、『文章世界』やそこで活躍する作家に対する挑戦ではないかと考えた。

『運』を分析する際には、『運』が原典を持ちつつも、女の話には〈尼殺し〉が追加され、「利益」の語の代わりに一貫して「運」が用いられることに着目した。また、『運』に描かれている青侍の不満、清水寺参り、夢の中のお告げが、それぞれ日露戦争と第一次世界大戦参戦前を想起させるものとして受け取れることを指摘した。それらの手続きによって、時局と絡めて読んだ場合、『運』には反戦思想を読み取ることができると結論付けた。

もし『運』が同時代性、政治性を帯びる作品であるとすれば、従来の作品の見方を大きく変えることになる。今後は同じ問題意識を持ちながら、芥川の他の作品にも目を向けたい。政治的な意見が作中に落とし込まれている可能性を探ることで、従来とは異なる角度から、芥川の初期作品の特徴に迫ることができるのではないかと考える。

注

1）奥野久美子「恒藤恭、芥川龍之介の日露戦争―トルストイの読書体験とあわせて―」（『大阪市立大学史紀要』2014 年 10 月）参照。ここでは熊谷信子「芥川龍之介の描いた日清・日露戦争―「首が落ちた話」」（『遊卵船』2004 年 6 月）、熊谷信子「芥川龍之介の描いた日清・日露戦争（続）―「将軍」齟齬の連鎖」（『遊卵船』2005 年 5 月）についても紹介されている。

2）関口安義『芥川龍之介新論』（翰林書房、2012）など。奥野（前掲論文）、塚本章子「芥川龍之介「軍艦金剛航海記」論―第一次世界大戦と軍備拡張の時代の中で―」（『国文学攷』2015 年 3 月）は、芥川が海軍機関学校の嘱託教官であった時に教え子であった篠崎礒次の話をまとめた、諏訪三郎『敗戦教官芥川龍之介』（『中央公論』1952 年 3 月）に触れる。そこから芥川が第一次世界大戦中に反戦的な考えを持っていたことが分かる。また奥野、塚本は、芥川が『侏儒の言葉』で軍人批判をしていることにも触れる。塚本は芥川による記録文『軍艦金剛航海記』（『時事新報』、1917 年 7 月 25-29 日）に芥川の「西洋列強への参入や軍拡競争に、何の意味も見出せないという冷ややかな視線」を読み取る。芥川の社会主義思想への関心についても論じる。

3）吉田精一『芥川龍之介』（三省堂、1942 年、130 頁）、長野甞一『古典と近代作家―芥川龍之介』（有朋堂、1967 年、85-93 頁）、菊田茂男「芥川龍之介の歴史小説の方法（上）―「運」の成立を中心として―」（『比較文学』1971 年 10 月）、布野栄一『芥川龍之介―その歴史小説と『今昔物語』―』（桜楓社、1973 年、73 頁）、丸山茂「芥川龍之介の初期歴史小説について―『運』を中心として―」（『弘前学院大学国語国文学会学会誌』1981 年 3 月）、石割透『芥川龍之介―初期作品の展開』（有精堂出版、1985 年、142 頁）、中村友「「運」―『エピクロスの園』から見た翁と青侍―」（『学苑』1989 年 1 月）、駒尺喜美『芥川龍之介の世界』（法政大学出版局、1992 年、41 頁）、河野有時「芥川龍之介「運」論」（『日本文芸論稿』1995 年 2 月）、小澤保博「芥川龍之介研究ノート（9）」（『言語文化論叢』2012 年 3 月）など。その中で、栗栖眞人「語られぬ翁の思い―芥川龍之介『運』について―」（『桜文論叢』2006 年 2 月）は、本作に芥川の女性観を見るものである。

4）西沢正二「芥川龍之介『運』の方法をめぐって」（『解釈』1984 年 7 月）、松本寧至『越し人慕情 発見芥川龍之介』（勉誠社、1995 年、29-40 頁）、山崎甲一『芥川龍之介の言語空間―君看雙眼色』（笠間書院、1999 年、212-222 頁）（初出は『鶴見大学紀要［第一部］国語国文学篇』1985 年 3 月）など。松本は「漱石の死をタイムリーに書く」ことで「興津弥五右衛門の遺書」で乃木希典と興津を重ねる「鷗外のひそみにならった」とも論じる。

5）紅野敏郎「第一次世界大戦と文壇」（『国文学 解釈と教材の研究』1964 年 10 月）、大津山国夫「第一次世界大戦と文壇―藤村「戦争と巴里」を中心に―」（『国文学 解釈と教材の研究』1967 年 9 月）、池内輝雄『岩波講座 日本文学史 第 12 巻 20 世紀の文学 1』

（岩波書店、1996 年、189-190 頁）は時代を概観する。

6）紅野敏郎（前掲論文）は武者小路実篤、内田魯庵に言及する。その他に内藤民治主宰「中外」が軍国主義排撃の姿勢をとったことを取り上げる。大津山国夫（前掲論文）は武者小路実篤の他に島崎藤村にも触れる。池内輝雄（前掲書）も反戦論・反戦小説を取り上げる。中山弘明『第一次大戦の〈影〉世界戦争と日本文学』（新曜社、2012 年、24-26 頁）は内田魯庵や上田敏の戦争に対する慎重な姿勢や、夏目漱石の『点頭録』（「東京朝日新聞」1916 年 1 月 1・2 日）を紹介する。大和田茂『社会文学・一九二〇年前後―平林初之輔と同時代文学』（不二出版、1992 年、217 頁）もまた漱石の『点頭録』について述べる。

7）紅野敏郎、前掲論文

8）大和田茂（前掲書、213-218 頁）は『文章表現』『太陽』『中央公論』などの雑誌で第一次世界大戦に関する文章が掲載されていたことを指摘する。

9）宮山昌治「純粋持続の効用―大正期ベルクソニスムと戦争―」『成城文藝』2000 年 2 月

10）宮山昌治、前掲論文

11）宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」（『人文』2006 年 3 月）

12）中山弘明（前掲書、72-76 頁）も臨川がベルクソンの戦争観を紹介する中で戦争を「一つの生命現象として認識する視点」を提示したことを指摘する。

13）池内輝雄（前掲書、189-190 頁）は「ベルグソン哲学の紹介者中沢臨川のように（中略）手放しで戦争の効用を称えるものが多かった」と国内の状況を述べる。

14）中山弘明、前掲書、27 頁

15）日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第五巻』（講談社、1977 年）

16）大和田茂、前掲書、213 頁

17）中山弘明、前掲書、26 頁

18）『赤い鳥』の反戦作品を調査した金森友里「雑誌『赤い鳥』における戦争観―創刊一九一八年から休刊一九二九年までの傾向―」（『富大比較文学』2012 年 12 月）参照。鈴木三重吉が反戦小説を残したことを指摘し、「確かに戦争に対して関心を抱き、また問題視していたと分かる」と述べる。

19）花袋の戦争観およびそれにかかわる創作態度に迫るためには、更なる考察が必要である。花袋の戦争観については、和田謹吾『自然主義文学』（至文堂、1966 年）、渡邉正彦「田山花袋の「蒲団」と戦争観」（『日本文学』1989 年 8 月）、渡邉正彦「田山花袋『一兵卒』論（Ⅰ）―花袋の戦争観を中心に―」『日本文学の心情と理念』（明治書院、1989 年）などに詳しい。

20）高橋龍夫「鼻におけるベルクソン哲学の陰影」（『日本語と日本文学』2001 年 2 月）、高橋龍夫「ベルグソン」（関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房、2003 年）。芥川の読んだ四作は「時間と自由」（1896）「笑い」（1900）「形而上学入門」（1903）「創造的進化」（1907）とされる。

21）この経緯は、関口安義『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、1999 年）などに詳しい。
22）『芥川龍之介全集 第十八巻』（岩波書店、1997 年）
23）吉田精一『芥川龍之介』（三省堂、1942 年）において典拠として指摘されるが、これより早く、竹内真『芥川龍之介の研究』（大同館書店、1934 年）は「今昔物語巻十六第三十話、清水寺観音の利生記の一、宇治拾遺物語巻十一ノ七、清水寺御帳たまはる女」と指摘する。安田保雄『比較文学論考 続編』学友社、1974 年）は芥川がどの『今昔物語集』を読んだかを論じる。芥川が見たといわれている『国文叢書第十六冊 今昔物語上巻』（博文館、1924 年）において「貧女仕清水観音値盗人夫語第卅三」は巻第六にあたる。
24）引用は『校註国文叢書第十六冊 今昔物語 上巻』（博文館、1924 年）を参照。
25）高橋亀吉『大正昭和財界変動史 上巻』（東洋経済新報社、1954 年、54 頁）参照。「景気擡頭が、大正四年末頃から五年初頭にかけて一度び起ると、それまで抑圧せられていた大戦景気人気が俄然勃興して、爾後は、堤を決した洪水の如き勢いで急速に大景気の波を打つに至った。しかして、その波は大正五年下期に入ると一段と高調化し、株式市場は同年十月末を以て戦中の最高を画したが、財界一般が大戦景気の最高調を来したのは大正六年であった」
26）高橋亀吉（前掲書、3 頁）に「日清戦争は戦費約二億二千万円（外債なし）に対し、償金訳三億六千万円を獲得したので戦後経営は容易であった。しかるに、日露戦争においては、戦費総額約二十億円近くを消耗しながら、一厘の償金もなく、しかも戦費中約十億円は外債に依存し、内債また六億八千万円を増大している。」とある。また、「大戦勃発直前の世界の財界は、欧州米州ともに不景気状態にあったが、就中わが財界は深刻な不況期にあった。顧みるに、当時のわが財界は、日露戦中戦後における過度の外債政策の余殃が全面的に露呈し、産業は外資輸入期における過度の設備拡張に悩み、国際収支は元利支払のための外債政策の続行が遂に行き詰り、正貨準備は枯渇し、しかも入超は依然続き、対外支払財源に窮迫して、わが国は正に財政的破産前夜の窮地に陥っていた」（21-22 頁）とある。
27）井上馨侯伝記編纂会編『世外井上公伝 第 5 巻』（内外書籍、1934 年、366-367 頁）参照。「我が政府は日英同盟の誼に基づき参戦に決意し、翌八日閣議の席上、元老の参集を請ひ、その意見を求めることになつた。元老側に於て二三意見もあつたが、結局閣議の議決を是認し、こゝに正式に参戦の事が決定した。興津にあつた公は、八日の会議には列席しなかつたけれども、欧州大戦の勃発こそ大正新政に於ける我が帝国の世界的発展を期する絶好の機会であることを感ぜざるを得なかつた。公はこの好機を逸せず、一大外交方針を樹立し、挙国一致を以てこの大局に処せざるべからずと為し、その趣意の大綱を口述して、望月に筆記せしめ、之を山縣及び大隈首相に伝達し、当局を激励するところがあつた。その要領は左の如くである。
　一、今回欧州の大禍乱ハ、日本国運ノ発展ニ対スル大正新時代ノ天祐ニシテ、日本

国ハ直ニ挙国一致ノ団結ヲ以テ、此天祐ヲ享受セザルベカラズ。（後略）」

28）堀雅昭『井上馨 開明的ナショナリズム』（弦書房、2013 年、255 頁）に「六月二八日にオーストリアの皇太子がセルビア青年にサラエボで暗殺されたことで、七月二八日に欧州戦争（第一次世界大戦）がはじまる。八月四日にイギリスがドイツに宣戦布告し、日本は日英同盟の関係により八月二三日にドイツに宣戦布告した。病床の馨は歓喜し、イギリス、フランス、ロシアと協力し、「東洋ニ対スル日本ノ利権ヲ確立」するよう山県有朋と大隈重信に伝えた。日露戦争後にイギリスやアメリカから孤立し始めていた日本が再び欧米と接近し、そのうえでフランス資本の導入や中国支配者の懐柔を行うことで、近代化を再出発できるチャンスだったからだ」とある。

29）日本歴史学会（編）『坂上田村麻呂 新稿版』（吉川弘文館、1988 年、190 頁）によると「田村麻呂が京都に清水寺を建立したと伝える文献はいくつかあり、建立の由来をのべる縁起類にも異本が多く存し、内容はかならずしも同一ではない」という。

30）同上（207-208 頁）参照。「鎌倉時代の末、元亨二年（一三二二）に虎関師練がまとめた『元亨釈書』の「清水寺延鎮伝」によると、一段と脚色が加わり、もはや史実からまったく遊離してしまう。奥州の逆賊の名は「高丸」となり、高丸は駿河の国まで攻め上り「清見関」を目指した（日本武尊の話も混入させたか）。ここで田村麻呂が出陣したと聞いて高丸は奥州へ退いた。田村麻呂の軍は賊とはげしく戦い、官軍の矢が尽きた。その時、小比丘（僧）と小男子とがあらわれ矢を拾い田村麻呂に渡した。田村麻呂はあやしみながらもその矢で高丸を射て、「神楽岡」でついに高丸を討ちとり、その首級を都へもち帰った。田村麻呂が延鎮に事の子細を語ると、延鎮は勝軍地蔵と勝敵毘沙門の二像を造り祈ったというので、その二仏像をみると、矢の瘢、刀の痕があり、脚は泥土にまみれていた、というような話になっている」とある。

31）岩崎英重編『坂本龍馬関係文書第 1』（日本史籍協会、1926 年、496-502 頁）

32）宮内省御歌所録事・加藤義清作詞。寺田伊助（編）『国母陛下の御瑞夢』（吉川弘文館、1904 年）に掲載。「国文学研究資料館 近代書誌・近代画像データベース」の奥付には「高等小学校教員用、同児童用、尋常小学校教員用唱歌科教科書」とある。

＊芥川龍之介作品の引用は『芥川龍之介全集』（岩波書店、1995-1998 年）に拠る。引用中の旧字体は現行の字体に直し、ルビや圏点は省略した。傍線は論者による。

〈**キーワード**〉芥川龍之介　運　ベルクソン　第一次世界大戦　『文章世界』

Rereading Ryūnosuke Akutagawa's *Un*

MIZUNO Akiko

Very little research has been conducted to interpret Ryūnosuke Akutagawa's political opinions from his early works. This paper attempts to interpret Akutagawa's anti-war stance from his novel *Un*(Luck). At the time when Akutagawa was writing the novel, Bergson's philosophy was distorted in Japan. Writers of naturalistic literature stated their pro-war opinions, sometimes by referring to Bergson's distorted philosophy. Akutagawa's *Un*(Luck) is deemed to criticise such opinions. This paper focuses on how the Japanese word *goriyaku* (literally meaning 'blessings') is never used in the novel and how the novelist included in the plot a story told by an old man about a woman who made a wish to the Goddess of Kannon at Kiyomizu-dera Temple and ended up killing a nun. The paper also points out that the 'recession', 'Kiyomizu-dera Temple' and 'message from the Goddess in a dream' described in the novel evoke the Russo-Japanese War and WWI. It then concludes that *Un*(Luck) can be interpreted as a work that expresses the novelist's rejection of the opinion that a country may wage war if it is in its own interests through the words and attitude of the old man in the novel.

Keywords: Ryūnosuke Akutagawa, *Un*(Luck), Henri Bergson, World War I, *Bunsho Sekai*